日本漢詩文における重複語形調査（二）

――『田氏家集』『都氏文集』畳語一覧――

中山大輔
安部清哉

論文要旨

『田氏家集』は平安前期に活躍した官人島田忠臣の漢詩二百首余りを集めた私家集である。また、『都氏文集』も同時代の官人都良香の漢詩文を集めた私家集であり、その内現在七十作品余りが伝存している。いずれも、平安前期の本邦の漢語受容の状況を窺える貴重な資料である。本稿はこの二集の全文を調査し、同字反復の形態を持つ畳語三十種（延べ三十八例）を抽出した。畳語は中国語音によって語義を構成する場合が多く、その用例を調査することで、本邦においてどの程度当時の中国語への理解が進んでいたのかを概観する資料になると考えられる。

キーワード【田氏家集、都氏文集、畳語、漢語、日本漢文】

一、はじめに

本稿執筆者は、これまで平安前期以前の本邦漢詩文における畳語の使用実態について調査を進めてきた（中山（二〇二二甲）、他）。その中で、畳語は主に擬声語の性質を持つものが多く、中国語音に従って意味を構成している特徴を持ち、本邦独自の、いわゆる和習の語が生まれにくい点について考察した。そうした畳語の特質を踏まえ、当時本邦で用いられていた畳語の用例を調査し、本邦における中国語への理解がどの程度深まっていたのかを考察することが本稿の目的である。

本稿では、島田忠臣の漢詩集『田氏家集』と、都良香の漢詩文集『都氏文集』の二集に用いられた全ての畳語を一覧にまとめ、報告する。島田忠臣と都良香は、共に平安前期において第一線で漢詩文を学び作品を残した人物であり、両集は当時の日本漢詩文の様相を概観する上で貴重な資料であると考えられる。

二、『田氏家集』畳語用例

本章では、『田氏家集』中に用いられた畳語について報告する。『田氏家集』は三巻からなる島田忠臣の漢詩集であり、二一三首の詩が収められている。島田忠臣は天長五年（八二八）生、寛平四年（八九二）卒の官人で、菅原道真の岳父にも当たる人物である。

まず、『田氏家集』の畳語の用例数について、以下表一にまとめた。用例数の調査方法については後段の表二凡例を参照されたい。

【表一】『田氏家集』畳語数

『田氏家集』作品数	畳語異なり語数	畳語延べ語数	一首当り畳語数
213首	19語	24例	0.11例

※「一首当り畳語数」は小数第三位以下四捨五入

一首当り畳語数から、『田氏家集』においては約十首に一例の頻度で畳語が用いられていることが分かる。次に、調査で得られた全畳語用例を表二（次頁）に掲出した。

《表二凡例・畳語用例調査方法》

○『田氏家集』を全文、二度通覧することによって調査し、畳語（同字反復の熟語）を全て抽出した。畳語とはならない同字の連続は『田氏家集全釈』の解釈を参考に、文脈を判断して除いた。掲載語順は現代仮名遣い音読み（「読み」欄記載）の五十音順とした。

○『田氏家集』本文は中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釈』（以下**全釈本**と略記する）に拠り、各語の「用例所在」は全釈本の作品番号によって示した。なお、『田氏家集』に収められている作品の文種は全て詩である（詩序を含む）。

○「全唐詩用例数」には、『全唐詩検索系統』の検索結果における各語の用例数を記した。検索結果の各例文は精査していないため、畳語ではない単なる同字連続の例も含まれる可能性がある。異体字や通用字等で検索した語については、その字を記載した。

ここで、『全唐詩』に一例しか見られなかった畳語「親親」について触れておきたい。まず『田氏家集』の用例を確認する。

◎『田氏家集』巻之下　一五〇「喜勝閣梨昇法橋」［本文・訓読文は全釈本による］

親親曾忝一家遊　親親　曾ては忝くす　一家の遊
道境初看寵擢優　道境（だうけい）初めて看る　寵擢の優なるを
飛錫断将時醒酔　錫を飛ばして　断ちて時と醒酔し
護珠休与世沈浮　珠を護りて　休（いこ）ひて世と沈浮す
（後略）

【表二】『田氏家集』畳語一覧

	語例	読み	用例所在（作品番号）	全唐詩用例数
1	云云	ウンヌン	一六七	22
2	看看	カンカン	八五	42
3	玄玄	ゲンゲン	二〇六	7
4	遑遑	コウコウ	八三、一四二	16
5	処処	ショショ	四九、一〇一	処 348
6	親親	シンシン	一五〇	1
7	寸寸	スンスン	四〇	14
8	声声	セイセイ	一五七	聲 81
9	凄凄	セイセイ	一二	凄 106
10	棲棲	セイセイ	八三※（捿捿）、一四二	22
11	寂寂	セキセキ	一六	246
12	続続	ゾクゾク	一三六序※	續 2
13	朝朝	チョウチョウ	一四一	163
14	年年	ネンネン	一六九、一六九	565
15	亹亹	ビビ	一六七	12
16	彬彬	ヒンピン	一六	5
17	紛紛	フンプン	五、一二二	309
18	綿綿	メンメン	四〇	65
19	了了	リョウリョウ	一九九	18

※10「棲棲」の内、詩八三では「捿捿」（手偏）になっていた。しかし、『漢語大詞典』並びに『大漢和辞典修訂第二版』によると「捿」は「棲」（木偏）と通用とされている。『田氏家集』の詩八三における「捿捿」と詩一四二における「棲棲」も、文脈上同等の意味で用いられていると考えられるため、本表では「棲棲」に一括した。

※12「続続」の詩一三六の例は詩序中の用例である。

詩題にもあるが、「勝闍梨」（全釈本によると勝延）が法橋上人位に昇るお祝いに贈った詩と考えられる。この詩の冒頭に「親親」は用いられているが、全釈本では訓み下し文においては振り仮名も付されず、解釈欄にて単に「親戚。」とだけ解されていた。

「親親」の辞書語釈としては、『漢語大詞典』には「❶愛自己的親属。❷親属：親戚。❸対心上人的昵称。❹至親：非常親愛。❺猶親熱、親切。」とあり、『大漢和辞典（修訂第二版）』には「㈠みよりの者をしたしみ愛する。又、父母をしたしむ。㈡親戚をいふ。」とあった。忠臣詩の例も、全釈本では「親戚」と解されていたが、『漢語大詞典』❶・『大漢和辞典』㈠の「親族を親しむ」の意味にも解釈できそうである。またあるいは、曾て勝闍梨に懇意にしてもらった事を詠んでいるので、『漢語大詞典』❹の「至親」（「大変親しい」本稿執筆者意訳）の意にも取れるだろうか。以下中国における用例を見てみたい。まず『孟子』に一例確認できた。

○『孟子』尽心章句上［訓読含め『新釈漢文大系四』による］

於民也、仁之而弗親。**親親**而仁民、仁民而愛物。

民に於けるや、之を仁すれども親しまず。親を親しみて民を仁し、民を仁して物を愛す。

この「親親」について『新釈漢文大系四』では、下を「親」（親族）

と目的語に訓み、「親族を親しむ」意味に取っていた。

次に、『全唐詩』で一例のみ検索された用例を引用する。

○『全唐詩』巻八二八　貫休「施萬病丸」［『全唐詩検索系統』より］

（前略）

藥王藥上親兄弟　救人急於己諸体

玉毫調御偏讃揚　金輪釈梵咸帰礼

賢守連心亦相似　不吝**親親**拘子子

曾聞古徳有深言　由来大士皆如此

貫休は唐末から五代にかけての僧であり、時代としては忠臣よりも後世の用例となる。ここでは同句中に「子子」（子は子たり。『論語』顔淵などに例があり、子は子としての道を尽くすべき、という意味）とあるのが注意される。これを考慮すれば、対応する「親親」も、「親は親たり」（親は親の道を尽くす）と解釈すべきと考えられる。また、僧の詩作であるだけに「金輪」など仏教語も散見されるが、忠臣の詩も阿闍梨に贈った内容であり、共に仏教に関わる点は興味深い。ただ、「親は親たり」という解釈は、忠臣詩の文脈には合わない様に思われる。

「親親」については、唐詩にはほぼ用いられない語であった可能性が高く、忠臣は『孟子』などの中国文献からこの語を学んだものと考えられる。

三、『都氏文集』畳語用例

本章では、『都氏文集』中に用いられた畳語について報告する。『都氏文集』は、都良香の個人詩文集である。元の巻数は未詳であるが、現在三巻分、計七十二作品が伝存する。伝存作品の種別内訳は、賦3・論1・銘序1・銘5・讃7・表10・詔書5・勅書9・勅符5・牒1・状9・対策2・策問8・策判4・省試詩判2（分類は中村・大塚『都氏文集全釈』に拠る）であり、賦3首（内一首は題のみ残存）以外の六十九作品は全て散文作品となる。都良香は承和元年（八三四）生、元慶三年（八七九）卒の官人である。

まず表三に『都氏文集』の畳語用例数をまとめた。用例数の調査方法については次頁記載の表五凡例を参照されたい。

【表三】『都氏文集』畳語数

『都氏文集』作品数	畳語異なり語数	畳語延べ語数			一作品当り畳語数
72作	12語	計14例	2	賦	0.19例
			1	銘	
			2	讃	
			2	表	
			2	状	
			4	策問	
			1	評	

※「一作品当り畳語数」は小数第三位以下四捨五入

『都氏文集』（残存分）は先述の通りほぼ散文作品しか伝わってい

ないが、「一作品当り畳語数」では詩のみを収録した『田氏家集』の0.11例よりも多い0.19例であることが分かる。この「一作品当たりの畳語数」について、中山（二〇二二甲）掲載の「表一　上代・中古前期の本邦漢詩文における畳語用例数」より、他資料の数値を併せ比較のため以下表四にまとめてみた。

【表四】　上代・中古前期の漢詩文集における一作品当り畳語数

資料名	一作品当り畳語数
田氏家集	0.11
都氏文集	0.19
菅家文草後集	0.40
懐風藻	0.14
凌雲集	0.39
文華秀麗集	0.36
経国集	0.47
唐詩選	0.32
白居易詩	0.84

※中山（二〇二二甲）掲載の「表一　上代・中古前期の本邦漢詩文における畳語用例数」より、各資料の畳語延べ語数÷作品数として算出。小数第三位以下四捨五入。「白居易詩」は高木正一『中国詩人撰集　白居易』岩波書店、一九五八年により調査。

表四より、『田氏家集』『都氏文集』と『懐風藻』のみ一作品当り畳語数が0.2例以下であり、その他は全て0.3例以上であることが分かる。その点から見れば、島田忠臣と都良香は比較的漢詩文に畳語を用いなかった、とも取れるだろうか。

次に、調査で得られた『都氏文集』全畳語用例を表五に掲出した。

《表五凡例・畳語用例調査方法》

○『都氏文集』の現存部（三、四、五巻）を全文、二度通覧して調査し、畳語（同字反復の熟語）を全て抽出した。掲載語順は現代仮名遣い音読み（「読み」欄記載）の五十音順とした。

○『都氏文集』本文は中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釈』（以下**全釈本**と略記する）に拠り、各語の「用例所在」は全釈本における頁数によって示した。

○用例のある作品の文種も「用例所在」頁数下に略称で記した。略称はそれぞれ以下太字の通り。**賦**＝賦、**銘**＝銘、**讃**＝讃、**表**＝表、**状**＝状、**問**＝策問、**評**＝評。

○「全唐詩用例数」の調査方法は表二に同じ。

【表五】　『都氏文集』畳語一覧

	語例	読み	用例所在（頁数・文種）	全唐詩用例数
1	一一	イチイチ	一七二問、一八五問	111
2	汲汲	キュウキュウ	四賦	18
3	皎皎	キョウキョウ	六三表	67
4	七七	シチシチ	一四三状、一四七状	2
5	漸漸	ゼンゼン	二〇三評	31
6	忿忿	ソウソウ	四賦	匆33
7	蒼蒼	ソウソウ	六三表	367
8	団団	ダンダン	二二銘	團59
9	皤皤	ハハ	三〇讃	11
10	紛紛	フンプン	二七讃	309
11	明明	メイメイ	一八五問	31
12	六六	ロクロク	一七二問	1

ここで、参考まで、『全唐詩』に一例しか見られなかった畳語「六六」について触れておきたい。まず『都氏文集』の用例を確認する。

◎『都氏文集』巻第五「辨地震」（部分）［本文・訓読文は全釈本による］

尽清餘化之沢、　　尽く餘化の沢に清められ、
娑婆世界、　　娑婆世界は、
争鑽遺致之堅。　　争ひて遺致の堅を鑽す。
六々卅六、六種動之名難分、　　六々卅六、六種動の名分かち難く、
一一各三、三因縁之別奚辨。　　一一各三、三因縁の別奚ぞ辨へむ。

「六六」は九九として36を意味していることが分かる。「辨地震」（本稿執筆者試訳・地震について述べよ）という策問（試験の問題文）中の用例であるが、文脈としては「娑婆」「因縁」と言った仏教語が見られ、仏教に関わる内容と言える。先述の通り「六六」は『全唐詩』に一例しか見られない他、『全唐文』にも用例が無かった（『中国哲学書電子化計劃』により検索）。ただ、以下に引用する『史記索隠』や、『漢書』顔師古注に例が確認でき、主に史書の注釈に用例が見出せた。

○『史記索隠』巻八（部分）［『欽定四庫全書』より］

以六甲除之、**六六**三十六、除三百六十餘五、故云大餘五也。

またこの他、『大蔵経データベース』（SAT2018）を検索すると、「六六三十六」だけでも三十六例あり、仏典において多く用いられた語であると考えられる。『都氏文集』の「六六」例についても仏教に関連する文脈で用いられていることから、こうした仏典に拠る表現である可能性が高いと言えるだろう。

四、まとめ

『田氏家集』と『都氏文集』における全畳語の調査結果を提示した。畳語の数としては、『田氏家集』は『都氏文集』（残存分）に比べて一作品当たりの用例数が少ないことが明らかになった。『田氏家集』は収録された作品が全て詩であるのに対し、『都氏文集』はほぼ散文作品しか残っていないという文体差があり、その点を考慮すれば、詩よりも散文により多く畳語が用いられる傾向があると言える。同音反復という畳語の性質からすると、感覚としては韻文に多く用いられる印象を受けるが、それとは逆の結果である。ただ、一作品の長さ（文字数）が、散文作品の方が長いという要因もあるだろうか。

また表四から、そもそも『田氏家集』と『都氏文集』は他の資料に比べて一作品当りの畳語数が少なく、詩のみを集めた『凌雲集』や『文華秀麗集』よりも少ない数である事も分かった。なお、『凌

雲集』等は複数の作者の作品を集めた撰集であり、個人の作品集である『田氏家集』『都氏文集』とは収載されている作品の質が異なっている可能性もある。果たして、これらの畳語数の傾向は島田忠臣と都良香のそれぞれの文章表現における個性からくるものなのか、今後、『本朝文粋』など今回の二集以外に残された両者の作品についても調査をして、考察を深めていきたいと思う。また、白居易など中国における韻文と散文の畳語数の比較も今後調査してみたい。なお、本稿の姉妹編として、『経国集』の畳語調査の結果を中山・安部（二〇二四）にて報告予定である。

〈参考文献〉

中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釈』汲古書院、一九八八年

中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釈』汲古書院、一九九三年

中山大輔（二〇二二甲）「『菅家文草』『菅家後集』を中心に見た上代・中古前期の漢語畳語の受容―併せて川口久雄氏校注旧大系の「適〻遇」を「適遇」に訂す」『人文』第二〇号、二六五―二九四頁

中山大輔（二〇二二乙）「『菅家文草』『菅家後集』から見た仏教語・唐代口語の受容―畳語を例として」『東洋文化研究』第二四号、七九―一二七頁

中山大輔（二〇二三）「道真『菅家文草』『菅家後集』の漢語研究（其三・『全唐詩』に稀少な畳語篇）「瑩瑩」「芬芬」「懍懍」「脛脛」―併せて川口久雄氏校注旧大系本の字体「煢」を検証する」『学習院大学国語国文学会誌』第六六号、九〇―一〇九頁

中山大輔（二〇二三）「道真『菅家文草』『菅家後集』の漢語研究（其四・鳴き声を表す畳語篇）「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」」『人文』第二一号、六七―九〇頁

中山大輔・安部清哉（二〇二四）「日本漢詩文における重複語形調査（一）―『経国集』篇―（『経国集』畳語一覧付載）」『東洋文化研究』第二六号

中山大輔（二〇二四）「『菅家文草』詩句「叱吒」校異―「吒吒」か「吒吒」か　中国語彙の受容として―」『訓点語と訓点資料』第一五二輯

〈参考資料〉

『漢語大詞典』上海辞書出版社、一九八六年

『佩文韻府』索引本、台湾商務印書館、一九六六年

『大漢和辞典（修訂第二版）』大修館書店、一九八九年

『全唐詩検索系統』http://cls.lib.ntu.edu.tw/tang/Database/index.html

『漢籍電子文献資料庫』http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm

『中国哲学書電子化計劃』https://ctext.org/zh

『SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース（二〇一八版）』https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/

内野熊一郎『新釈漢文大系四　孟子』明治書院、一九六二年

【付記】

本稿は、次の科学研究費による研究の一部として、漢語の本邦における初期の受容の一端を見るという視点からまとめたものである。中山の畳語研究の一環でもあり、中山が全体をまとめ、安部が加筆・助言した。

○日本学術振興会二〇二三年度科学研究費　基盤研究（C）23K00559（代表・安部清哉）

ENGLISH SUMMARY

A survey of reduplicated words in Japanese Chinese literature (II) — *Denshi-kasyu* and *Toshi-bunsyu* volume —

NAKAYAMA Daisuke, ABE Seiya

Denshi-kasyu is a private collection of over 200 Chinese poems written by Shimada no Tadaomi, during the Early Heian period. *Toshi-bunsyu* is also a private collection of Chinese literary works by Miyako no Yoshika, an official of the same period, of which more than 70 works have been handed down. Both collections are valuable materials that provide a glimpse into the reception of Chinese in Japan during the Early Heian period. This study examines these two collections in their entirety and identifies 31 examples of tautological reduplication. Since reduplication is often composed of Chinese sounds, it is believed that this survey of examples would provide an overview of the extent to which the understanding of Chinese in Japan at that time had progressed.

Key Words: *Denshi-kasyu*, *Toshi-bunsyu*, reduplications, classical Chinese words, kanbun.